

昭和初期の雑誌「ファッション」から読み取る 紳士服の流行と身嗜みに関する研究

徳山孝子

1. はじめに

現在、メンズファッションは多様化し、メンズ雑誌も多く出版されている。歴史を遡れば女性のファッションは、毎年のように流行が変わっているのに対して、男性のファッションはスーツスタイルが基本になっている。が、若者は、スーツスタイルよりもカジュアルなスタイルを楽しんでいるようだ。

男性の洋装は、女性の洋装より早く始まった。男性の洋装の原点は、江戸幕末の軍服であり、明治に入り軍服に続いて礼服や制服など公的な衣服として定着した。明治30年前後、外遊から帰った洋服姿の人たちから「ハイカラ」（英語の high collar の詰まったもの）という言葉が始まった。男性服だけでなく女性のあいだにもハイカラが流行っていった。大正5年、永井荷風は『洋服論』を発表した。『洋服論』には、女性の記述はなく、このころから背広に中折れ帽やソフト帽のサラリーマンが都市で目立つようになり、男性の通勤着として洋服が一般化してきていることがわかる、と記されていた¹⁾。大正時代の背広は、当時の写真から垣間見ることができる。が、背広の流行は、どのように取り入れられたのであろうか。調べた限りでは、昭和25年10月1日発行スタイル社から「スタイル臨時増刊男子専科」が出版された。編集後記では『日本で最初の画期的な男子専門のお洒落な雑誌です』（『 』は本文のまま記載、以下同様）と記されていた²⁾。その以前の昭和初期には、メンズ雑誌が見当たらなかった。ここでは、昭和初期の男性の洋装に着目した。

昭和初期に日本で初めて月刊誌として雑誌「ファッション」が発表された³⁾。著者は、洋裁文化の研究の一環として月刊誌「ファッション」を用いて、当時の女性の着こなしを研究した⁴⁾。出版当初は、日本人の体型に合うデザインをどのように着こなすのかが重要な課題であった。記事の中では、着こなしの褒め言葉として「スマートな」という感情表現を使い、スマートが一つの尺度になった。流行は、ヴォーグやフェミナの外国雑誌から情報を入手し、そのまま掲載した。さらに、ハリウッドの流行も併せて発信した。月刊誌「ファッション」の中には、紳士服の流行や身嗜みなどの記事が掲載された。月刊誌「ファッション」はメンズ雑誌ではないが、昭和初期の紳士服を知る上で貴重な史料であった。

本研究では、昭和初期に日本で初めて出版された月刊誌「ファッション」を用いて紳士服の流行

と身嗜みについて明らかにした。

2. 月刊誌「ファッション」について

月刊誌「ファッション」は、昭和8年12月1日に創刊された⁵⁾。柴山勝編集兼発行・印刷人のもとに発売され、ペンネームは柴山燐子であった。発行所のファッション社は、兵庫県武庫郡精道村打出宮川22にあり、関西では、はじめての月刊ファッション雑誌である。柴山は、編集者の領分に『ファッションもおかげで全国的に知られてまいりました』⁶⁾と昭和9年8月号には「ファッション」の浸透ぶりを説明している。昭和8年以降は、『昭和9年に太田菊子女史が「家庭と生活」を、つづいて今泉女史が「モダンライフ」をそれから「流行の王様」、遅れて宇野千代女史は「スタイル」が東京から出版された。』⁷⁾という記述から「ファッション」は、先駆的な月刊雑誌であったことがわかる。「ファッション」は、毎月発行され、阪神間という土地柄、上流階級あるいは中流階級のご婦人やお嬢様がモデルとなり、ファッションクラブを結成させ、時代の最先端を行くおしゃれでかつ知的な生活を提供した。その中には『外国のファッション・ブックの中から日本人に向くもの等ご紹介する考えでございます』⁸⁾と外国のファッション情報をいち早く紹介した。柴山は『ファッションを紹介するにあたり其服なり、帽子をつけてスタイル及び顔等が日本人でなければならないと云う事でございます』⁹⁾と外国人ではなく日本人の体型をととても意識していた。

ファッション社は、情報発信の場としてファッションクラブを結成した。昭和9年6月には、ファッションクラブの座談会が開催された(写真3)。ファッションクラブとは、ファッション社が主催となり、関西財界人のご婦人を中心とした会員が会員相互の親睦を計り併せて生活趣味の向上を目的として、毎月1回茶話会、座談会、講演会、音楽会、洋裁、美容術などが開かれた。その中に田中千代も会員の一人であった。今回の流行座談会では、柴山から『関西の流行は関西から、そしてファッションクラブの方々から流行を創みだして行きたいと存じます。皆様の御聲援によって百貨店や専門店の流行を指導して行こうというのが、この会の目的であり、使命であると考えているのでございます』¹⁰⁾と挨拶があった。

月刊誌「ファッション」の中には、「男子服の流行」、「殿方の御支度」、「サヴィル＝ロウ、ロンドンより」、「新春の礼装」、「紳士服の身嗜み読本」等、男のファッションに関連する記事が掲載された。男のファッションの情報は、ロンドン・サヴィルロウから流行が直接紹介された。



出席者

醫學博士有澤清氏夫人
 醫學博士廣瀨登一氏夫人
 廣瀨勝代
 實業家木間氏夫人
 本間いね子
 實業家山崎幸藏氏夫人
 山崎静子
 實業家大谷氏夫人
 大谷種子
 辯護士木場悦熊氏夫人
 木場貞子
 人像寫真家 マスターオオノリツ
 中山正一
 婦人洋装下着専門店大和商會
 三原
 大丸婦人洋装部
 里村女史
 大阪婦人新聞社長
 平松静子
 大阪日日新聞社
 河田玉枝
 ルミ美容院
 山口倫子
 ファッション社
 柴山燦子

写真1 ファッションクラブ 流行座談会

3. 紳士服の流行

『殿方の流行は、余り大きな変化がないようでございます』と記している¹¹⁾。背広は、1、2年で着捨てるものではないという理由からであった。創刊号には、「男子服の流行」として背広、オーバー、タキシード、モーニングが紹介された(表1)¹²⁾。男子服の流行は、色、形、生地から説明された。色は地色であり、生地は織りや柄の説明である。形は、上衣、チョッキ、ズボン一式で背広とされ、それぞれを説明している。上衣は、肩幅、衿幅、胸元の大きさ、ウエストライン、丈の長さである。チョッキは、丈の長さが中心であった。ズボンは、股上の長さ、ズボン幅や裾口の大きさである。釦は、釦の数である。創刊号の昭和8年秋、冬の流行は、『これまでの鋭角から軟らかな曲線を入れ気品ある豪快さがポイントである』と紹介された。

表1 昭和8年、男子服の流行(本文の記事をそのまま記載)

色	背広	
	形	生地
若者達は、鼠茶を基調としてグリーン等が人気。	肩幅は広くてゆったりと、幾分丸味を帯び、胸は緩やかにふくらみ、ウエストラインに従ってしっかりと締め、上衣の丈はやや長め。チョッキの丈は短く、ズボンの股上は深めに、腰骨より膝位までゆるやか。裾口は細め。衿幅は広く。釦は三つ釦より四つ釦。	スポーテックス、ローヤルテックス等の野性的感触の強いもの。大柄物は廃れて地味な而もスマートな小柄な物。綾とか地紋の縞物へと変わる。

タキシード (ディナー=ジャケット)		
色	形	生地
黒よりも夜の光線の下等では濃紺の方が落ち着きがあってスマート。	上衣の肩幅をゆったりと広く袖付に丸味をもたせて袖付を出来るだけ細め。釦は三つ。衿幅は四時半以上にして丸味を持たせ広く。衿の型はあまりとがらさない。ズボンは腰のあたりをゆるやかに。口は十八吋が今年の新しい型。	
オーバー		
色	形	生地
淡い鼠霜降とか薄茶霜降が色調の中心。	胴を余り締めず、肩幅は普通で、三つ釦大体ゆるやかな形です。若い方達には肩幅は広く胸のふくらみは下胴から裾へとストレートに付いております。スポーツライクなものとしてはダブル型がもてはやされます。	立体的な深味のあるパイル風のもの。ペロア、ビーヴァ等がよく出る。柄はダイヤナゴールとかレンボーンを推奨。
モーニング		
色	形	生地
	上衣は長くお尻をゆったり。前の開きは思い切って長めにカーブさせるのが流行。サキノニーヴキウナー、チエビオットなどの一つ釦又は二つ釦。	ズボンはチエビオットの荒い縞物がよろしい。

翌年には、ロンドンのサヴィルロウの流行をJ・Sさんが紹介した¹³⁾。夏の流行は、フランネルのロウンデスーツ（日本で云う背広の事）、色は濃い鐵鼠から淡い藤鼠に至るまで、フランネルには、皆白縞（チョーク=ストライプ）が入っていた。上衣は、中位の長さで、ややきっちりした胴、お尻はピッタリと合う。肩は芯を入れ、丈肩幅を広くする。さらに、今シーズンの最もスマートなスポーツの服装を紹介した。スポーツの服装は、今のカジュアルな服装である。女性の着こなしの褒め言葉として「スマートな」が使われたのと同様に、男のファッションにも「スマートな」という感情表現が用いられた。当時のファッションを説明する貴重な言葉であったと考えられる。最後にタキシード（ディナージャケットの事）は、サヴィルロウにおいてきっちり決まっていて、ダブルプレストのタキシードであった。J・Sさんの言葉に、『これはみなサヴィルロウの受売りですが、これを参考にする方は映画の真似をするより男らしい』と記していた¹⁴⁾。ロンドンの流行雑誌の受け売りとして「男のファッションの国勢調査」という記事が掲載された（写真2）¹⁵⁾。

男のファッションの 国勢調査

J · S



写真2 男のファッションの国勢調査

調査時期は、ロンドンにおいて皆がリヴィエラ通りへ避暑に行つて、仕事を持った本当の意味の紳士しか残つて居ない時に調査したものであった。雑誌記者は、ラッシュアワーと昼食時にビジネス街をモータリして、手帳と鉛筆を持って調査した。つまり、背広の型の調査である。たとえば、ダブルもしくはシングルか、ボタンの数、ラベルの形等いろいろな型があった。統計の結果、一番多い型は、三つボタン・ピークラベル¹⁶⁾ 35.4%、次に多いのが六つボタン・ダブルブレスト¹⁷⁾ 20.2%、三つボタン・ノッチラベル¹⁸⁾ 19%であった。二つボタンのノッチラベルは10%とあまり多くなかつた。記事の執筆者は、日本でこの調査をした場合、相当面白い型が発見できるが、流行記事に嘆かれるだろうと予測していた。昭和11年秋には『世界的にダブル・ブレストの背広や外套がふえて行く』と記されていた¹⁹⁾。ブレストとは、かならずボタンをつけて着なければならないこと

である。ダブルを一番着るのは、アメリカ人である。日本人は、プロポーションが悪いのでなかなかダブルを着こなせないようであった。

夏の服装は、英国に比べ日本は暑いため、日本独自の背広を用意していた。たとえば、『本麻でない木綿の背広も色々あります。それから薄いウールの白も悪くありません。白麻の代用としてさらしてない自然色の麻があります。国産でそう高くないのが出来ています。これは汚れも目立たず、また割合にスポーティーでよきものです。』と紹介している²⁰⁾。日本の夏の都会生活では、ネクタイなしでオフィスへ行く習慣はなかった。夏の服装は、サヴィルロウの情報を入手するのではなく、日本の気候風土に合った日本独自のファッションを提案していったと考えられる。

夏の紳士服以外の流行は、主に背広のダブルかシングルか、衿の形、ボタンの数などの違いで決まっていた。背広は、1、2年で捨てるものではないため『流行に拘泥するのめどうかと思います』と記されていた²¹⁾。日本の背広は、サラリーマンの通勤着・ユニフォームと考えるならば、流行が絶えず更新されているのではなく、横並びのファッション²²⁾と考えることができる。つまり個人がある程度与えられた社会的条件の中で他人との差異を見出し、自分の存在を主張している。紳士服は、遠くから見ると背広は同じ型であるが、近い所では背広の衿の形、ボタンの数、地柄など微妙な違いを醸し出し、そこに個性を主張していると考えられる。紳士服の背広の流行は、現在に至るまで衿の形やボタンの数など常に更新されているが、皆の共通イメージの中には“余り変化がない”と言わざるを得ないのであろう。

4. 紳士服の身嗜み

英国の身嗜みは、背広服にネクタイ、ステッキ、帽子、手袋の小物を合わせて着こなすことである。日本の昭和初期では、どのような身嗜みであろうか。

『身だしなみのいい人と言われるのは、目立たないで地味で、行届いて居なくてはならない。身だしなみの第一は、洋服の選択、取り合わせの上手なこと、第二は手入れである。この二つが両立して「身だしなみのいい人」になる』²³⁾と目立たないで地味な洋服を選択し、取り合わせを上手にする人が身嗜みのよい人であった。あるいは『日本人の男のおしゃれはいいものだ、男のおしゃれは着るだけだ。出来るだけ目立たない物を、出来るだけ無雑作に着る。身体に合う洋服を着ると云う事がおしゃれの第一歩である。第2は、環境に溶け合わなければならない。第3は付属品の調和と適法である。その場の空気に溶け込んでしまうような服装である』と記されていた²⁴⁾。当時の常識として洋服の色合いは、非常に制限されていて、黒、紺、薄紺、茶、鼠、緑であった²⁵⁾。真黒は、燕尾服、タキシード、モーニング等正式な服装に使われた。雑誌の中の情報では、日本人の体型に合わせて背広の色が決まっていた。たとえば瘦形でおとなしい方は、紺、薄紺、濃鼠である。スポーツマンタイプは、茶系統、薄鼠、背が低く太っている方は、黒地に鼠の霜降り、濃い茶、一般には、紺系統であった。日本人の身嗜みである目立たないようにするには、体型に合わせた色合いを決め

たことがおしゃれにもつながり、身嗜みのよい人と言われるようになったことがわかった。

英国では、男のファッションには相当難しい定則があると記している。この定則は、どこの誰が定めることなく自然に定まるようで、ロンドンのサヴィルロウあたりから出るようだ²⁶⁾。たとえば、『雨も降りもしないのに洋傘をぶら下げて歩いている。手袋も傘と同じで、持たなければならないことになっていたが、近頃これは持つよりもハメヨ、という実利主義になって来たらしい。日本人は、訳がわからない』と記している²⁷⁾。『日本の場合は、フロックコート、モーニングコート、プラスフォーから茶葉服までそれぞれ着る場合、気候に従って厳然と或法則を以て控えて居ります』と説明している²⁸⁾。特に紳士のレインコートは、晴天の日にレインコートを塵除け外套代りに着ても、よいか悪いかと云うことが、我が国のヴォーグ界に於いて、やかましく云はれたようだ²⁹⁾。一方、『近年日本紳士の方も、季節に依って、極端にきもの色合や地質を、支配することの少なくなったことは、喜ぶべきことと思います』と色合等の制限がなくなりつつある記事が記載されていた³⁰⁾。日本と英国では、環境や洋装の文化、歴史が異なるため、英国の定則をそのまま日本の法則には当てはまらない。日本では、紳士服の歴史も浅いため、背広服の法則といっても、背広服を同じ生地で作るという次元である。特に若者は、上衣とズボンの色の違ったものを着て現れる。お行儀が悪いと嘆いていた。一方で『20年程前には或人が日本人の洋服は、だぶだぶで其上に釧も当てずによれよれの中に納まって前屈みに小股でよちよちと歩いていた。それが近頃は板についたというか身についたと云うか、きちんとした洋服を折り目正しく着て颯爽と歩いている』³¹⁾と男性の身嗜みが整った記事もあった。

日本の男のファッションは、ロンドン・サヴィルロウの定則をそのまま月刊誌「ファッション」で紹介していたが、英国と日本とでは体型や環境なども違いがあり、日本の生活環境に合う身嗜みが紹介され、昭和初期には日本人らしい紳士服が定着していく期と考えられる。

昭和12年10月号の「ファッション」には『華美をつつしませう。無駄を省きませう。』と戦争の兆しが現れはじめた予感がする記事があった。身嗜みにも変化が見られ『自分の経済力に相当した品々を身につけるのが第一、それからその品々に自分の高い趣味を働かせるのが、必須の条件。そして最後に、不注意から生ずる無駄を極力避ける事。三拍子揃って初めて身嗜みのいい紳士と云はれるのであります。』³²⁾と物を買うときの注意として、質を選ぶことが第一であると説明した。今までの目立たないおしゃれをする精神主義から質を選ぶ合理主義へ変わりはじめたと考えられる。ファッション社では、パリやロンドンからの情報が今後どのように入手できるのかが問題となった。昭和13年には、今までのような外国雑誌から情報を入手し、そのまま掲載することが不可能になっていった。月刊誌「ファッション」から紳士服の記事は姿を消した時期でもあった。

5. おわりに

日本のメンズファッション雑誌は、昭和25年スタイル社から「スタイル臨時増刊男子専科」が出

版された。昭和初期は、メンズファッション雑誌は見当たらなかったため、日本で初めて月刊誌「ファッション」が出版された記事に男の洋装の記事が記載されていたため、男性のファッションを知る上で貴重な史料と考えた。そこで、メンズファッション雑誌が発行されていない昭和初期に、日本で初めて出版された月刊誌「ファッション」を用いて、当時の紳士服の流行と身嗜みについて明らかにした。

男のファッションの情報は、ロンドン・サヴィルロウから流行が直接紹介された。男子服の流行は、色、生地、形から説明された。形は、上衣、チョッキ、ズボン一式で背広とされ、それぞれを説明した。上衣は、肩幅、衿幅、胸元の大きさ、ウエストライン、丈の長さ、チョッキは丈の長さ、ズボンは股上の長さ、ズボン幅や裾口の大きさであった。釦は、釦の数であった。紳士服の流行は、遠くから見ると背広は同じ型であるが、近い所では背広の衿の形、ボタンの数、地柄など微妙な違いを醸し出しているため“余り変化がない”と言わざるを得なかった。夏の服装は、サヴィルロウの情報を入手するのではなく、日本の気候風土に合った日本独自の素材や織物を提案したと考えられる。スポーツの服装は、女性の着こなしの褒め言葉として「スマートな」が使われように、男のファッションにも「スマートな」という感情表現が用いられた。当時のファッションを説明する貴重な言葉であったと考えられる。

昭和初期の身嗜みは、目立たないで地味な洋服を選択し、取り合わせを上手にする人が身嗜みのよい人であった。当時の常識として洋服の色合いは制限され、日本人の体型に合わせて背広の色が決まっていた。身嗜みのよい人は、目立たないように体型に合わせた似合う色を決め、おしゃれを楽しんだと考えられる。日本の男のファッションは、ロンドン・サヴィルロウの定則をそのまま月刊誌「ファッション」に紹介したが、英国と日本とでは、体型や環境なども違いがあり、日本の生活環境に合う身嗜みが紹介され、昭和初期には日本人らしい紳士服が定着していく期と考えられる。昭和12年には、戦争の兆しが現れはじめ、目立たないおしゃれをする精神主義から質を選ぶ合理主義へ変わりはじめた時期であった。

引用文献

- 1) 小池三枝、野口ひろみ、吉村桂子：『概説日本服飾史』、光生館、2000年3月、pp.116
- 2) 「スタイル臨時増刊男子専科」、昭和25年10月1日、スタイル社、編集後記にて
- 3) 「阪神間モダニズム」展実行委員会編著、堀江珠喜：『阪神間モダニズム』、株式会社淡交社、平成9年10月22日、pp.126～pp.130
- 4) 徳山孝子：月刊誌「ファッション」から読み取る洋裁文化、武庫川女子大学関西文化研究センター発行・関西文化研究叢書11、2009年3月、pp.197～pp.214
- 5) 雑誌『ファッション』は、昭和8年12月1日～昭和14年8月31日まで発行し、戦争のため雑誌名が変わり、ファッションの情報を掲載することが難しくなった。が、内容を変えつつ雑誌『婦

人評論』は、昭和14年10月15日～昭和15年8月15日まで発行、さらには『日本の女性』が昭和16年1月25日～（池田文庫所蔵は昭和17年11月25日まで）発行された。

- 6) 「ファッション」、昭和9年8月25日、ファッション社、pp.35
- 7) 「ファッション」、昭和11年8月1日、ファッション社、編集後記にて
- 8) 「ファッション」、昭和8年12月1日、ファッション社、編集後記にて
- 9) 「ファッション」、昭和9年5月25日、ファッション社、編集後記にて
- 10) 「ファッション」、昭和9年6月25日、ファッション社、pp.22
- 11) 「ファッション」、昭和8年12月1日、ファッション社、pp.18, 19
- 12) 「ファッション」、昭和8年12月1日、ファッション社、pp.18
- 13) 「ファッション」、昭和9年4月21日、ファッション社、pp.10～pp.12
- 14) 「ファッション」、昭和9年4月21日、ファッション社、pp.10
- 15) 「ファッション」、昭和10年11月25日、ファッション社、pp.22, 23
- 16) ピークラベルとは、剣衿のことである。
- 17) ダブルブレストとは、衣服の胸の部分が二重になっているもの。すなわち、両前あわせの意味である。
- 18) ノッチラベルとは、きざみ衿のことである。
- 19) 「ファッション」、昭和11年9月1日、ファッション社、pp.23
- 20) 「ファッション」、昭和12年7月1日、ファッション社、pp.14
- 21) 「ファッション」、昭和9年4月21日、ファッション社、pp.10
- 22) 横並びのファッションとは、その時の社会の中に流通した背広という共通イメージの中に自分が入り込み、皆と同じものを着て安心すること。
- 23) 「ファッション」、昭和9年8月25日、ファッション社、pp.27
- 24) 「ファッション」、昭和11年12月1日、ファッション社、pp.14
- 25) 「ファッション」、昭和9年4月21日、ファッション社、pp.10
- 26) 「ファッション」、昭和8年12月1日、ファッション社、pp.18
- 27) 「ファッション」、昭和9年12月25日、ファッション社、pp.17
- 28) 「ファッション」、昭和12年5月1日、ファッション社、pp.22
- 29) 「ファッション」、昭和12年6月1日、ファッション社、pp.18
- 30) 「ファッション」、昭和12年8月1日、ファッション社、pp.11
- 31) 「ファッション」、昭和13年9月15日、ファッション社、pp.40
- 32) 「ファッション」、昭和12年10月15日、ファッション社、pp.12